

中国春季リーグ戦男子 1 部 Second stage 及び女子 2 部結果報告

広島大学体育会バレーボール部同窓生の皆様

(同窓会連絡フォームへ登録いただいた皆様及び同窓会やコートの仲間等でご連絡いただいた皆様へお送りしています。)

いつも大変お世話になっております。

広島大学体育会バレーボール部です。

4/26、27 に下関市総合体育館において、中国春季リーグ戦男子 1 部 Second stage が開催されました。

また、同日、ゼオンアリーナ周南において、中国春季リーグ戦女子 2 部 2 日目、3 日目が開催されました。

広島大学の結果は、以下のとおりです。

(男子)

vs 東亜大学

●0-3 (13-25、19-25、15-25)

vs 広島国際大学

○3-1 (25-19、21-25、25-14、25-15)

vs 広島経済大学

●0-3 (18-25、24-26、19-25)

(女子)

vs 山陽学園大学

○2-0 (25-19、25-19)

vs 山口大学

○2-0 (25-15、25-23)

vs 島根大学

●0-2 (23-25、27-29)

(女子 2 部最終結果)

1 位 島根大学 5 勝 0 敗

2 位 広島大学 4 勝 1 敗

3 位 周南公立大学 3 勝 2 敗

4 位 山口大学 2 勝 3 敗

5 位 山陽学園大学 1 勝 4 敗

6 位 川崎医療福祉大学 0 勝 5 敗

(中国学連 HP)

<https://chugoku.hiroshima-u.ac.jp/league-haru-top.html>

今回は女子会場のみのご報告です。先週、2 連勝と好スタートを切った広大女子は、2 日目も自分たちの形を徹底して連勝を 4 に伸ばし、最終戦は経験豊富な 2 年生が揃う島大に競り負けたものの、昨秋の 2 勝 3 敗から勝ち星を二つ増やし、2 部 2 位で 5 月 17 日に広島大学北体育館で行われる入替戦への出場を決めました。順位としては昨秋から一つ上げただけですが、個の能力で見れば 4 位や 5 位の可能性も十分あった中で、優勝に手が届くほどの戦いを 3 日間を通して出来たことは、順位以上に濃い内容で非常に素晴らしい戦いぶりでした。セッターとして半年も経験していない大石（2 年・宮崎・延岡高校）、公式戦初のフル出場となった長谷川（3 年・静岡・浜松北高校）の二人がキーマンでしたが、二人とも出来ないことよりも練習してきて出来るはずのことに終始集中出来ていたことが、3 日間チームとして一度も大きく崩れなかった要因であり勝因でした。今春のリーグ戦で優勝を狙うにはこの形しかないチームをわずか 4 か月で作りに上げた東（4 年・愛媛・宇和島東高校）は、チャンスボールでリズムを作り出せるようになった技術的な成長だけではなく、同じ空間にいてもほとんどの人が分からないレベルの流れを変える 1 点を的確に把握し、リベロチェンジでベンチにいてもコート内にいるかのように仲間に声をかけ続け、その結果、他のチームから感動したと言われるほどになりました。周南大が死力を尽くして山大を倒した最終戦は、もしかすると周南大が広大を目指していたからなのかもしれません。

島大戦では、東がフロントに上がるローテーションで中道（2 年・広島・基町高校）のサーブが嵌り、相手 2 枚を封じたところは見事でしたが、東が下がった 3 ローテで失点を重ね、攻撃はコンビがなく両レフトの引き出しに依存してしまうのが広大の現状です。隣コートの女子 1 部と比べると、2 部はボールが止まったように見えるほどラリーがゆっくりしていて、速い攻撃は島大の表ローテでキャッチが返ったときのみ、と言うのが 1 部と 2 部の力差を物語っています。1 部昇格のためには、昇格後も勝てることが大前提で、1 部 5 位以上の力がない限り昇格は難しく、万が一入替戦で勝利しても来季に降格するのが入替戦の歴史です。1 部は 5 セットマッチのフルセットを 2 試合した昨秋 6 位の福山平成大学が、翌日の第 1 試合で昨秋 1 位の環太平洋大学に勝つレベルですので、一日 2 セットや 4 セットで苦しんでいるようでは到底戦い抜くことはできません。チームの目標を五大優勝と秋リーグ 2 部優勝ではなく、もし 1 部昇格を目標とするのであれば、ほとんどの選手が考え方や生活そのものを変えない限り達成は不可能で、春リーグ仕様に仕上げたチームは一度壊さないと 1 部昇格はあり得ません。もちろん、目標のみ掲げて実際には達成を目指さない選

択肢もあり、その方が大学生活としては楽しく充実した毎日を過ごせます。ゴールまでの距離を正確に測ることはせず、形だけの方が結果が出ないリスクを許容できますので、振り返ったときには良い一年だったと思えることでしょう。

いずれにせよ、今回の島大戦は展開や試合順など多くの利があつての僅差ですので、このまま次の対戦を迎えると間違いなく簡単に敗れます。まず、広大はキャッチと呼べるキャッチがほぼ返っていません。光本（2年・岡山城東高校）は肘が曲がりボールの勢いに体が押されてリズムを作り変えることが出来ず、いわゆる「出す」とは正反対にボールがネットから逃げてしまっています。岩永（3年・長崎西高校）は自由過ぎてもはやキャッチとは呼べない状況で、上半身の強さを生かしたオーバーに切り替えるなど根本的に見直さないといけません。現状、大石はネット際でトスを上げられませんが、だからと言ってキャッチを離しては上達も成長もありませんので、相手ブロッカーが思わず飛んでしまう位置で上げられるようになるまで失点は許容することが必要です。1部の福山平成大学は1年生の好セッターを迎え攻撃陣が躍動していますが、それ以上にレシーブが上がるようになったことが躍進の大きな原動力になっています。レシーブは技術力が向上したと言うよりも、ボールが上がると自分たちでもワクワクする攻撃ができるので、楽しくて仕方がないモチベーションが集中力を上げ、結果としてボールも上がっているように感じます。大石は元々アタッカーで高さもありますので、自分の強みを生かせるセッターになれるようにチャレンジを続けて欲しいと思います。

ワクワクしない広大の攻撃の原因は速攻とコンビがないからですが、岩永のボールを下から上にあげるフェイント、中道の強く打つだけの攻撃、まだまだ力強さに欠ける長谷川のスパイクも拍車をかけてしまっています。西岡（2年・兵庫・姫路高校）はプッシュで、東は軟打と強打を使い分け、動いてサイドアタッカーを助けるなどの工夫も見られますが、それ以外は1部で通用しないことをひたすら繰り返しているようにしか見えません。1部ではキャッチが割れても速い攻撃ができるのが当たり前で、スパイカーの助走も全く違う速さで行われています。また、レシーブは2部では意図しないボールに対してすぐに目を切ってしまうので、結果として諦めが早くなっています。これは練習からもそうっていて、取れないボールには足はその場のまま手をついて下を向いているだけですので、いつまで経っても取れるボールの範囲は広がりません。特に広大は高い位置ですぐにボールを触りますが、重心が高いと下半身の力を使えないので一向に時間が生まれません。ボールを体に引き付けられると「体に当てる」「弾く」から「上げる」「出す」に変わりますので、練習も一から見直すつもりで新しいスタートを切って欲しいと思います。

男女1部 Final stage は、5/10、11 に広島経済大学石田記念体育館で行われます。
引き続きよろしくお願いいたします。